

平成20事業年度 事業報告書

自 平成20年4月 1日
至 平成21年3月31日

国立大学法人福島大学

国立大学法人福島大学事業報告書

「はじめに」

福島大学の基本的な目標である「教育重視の人材育成大学」を目指し、学長のリーダーシップのもと、今後10年間の大学運営方針をまとめた長期構想計画として、「教育の質の向上」「大学院の創設・充実」「特色ある研究の推進」「地域連携の強化」を重点目標とする「福島大学プラン2015」を策定し、教育環境の改善を積極的に進めた。

本学における財政上の主要課題は、予算総額の約80%を占める人件費を縮減し、教育・研究のための財源を確保すること。一般管理費の節減及び業務の改善合理化を進めるとともに、外部資金の獲得拡大を図り、自己収入を増加させ、運営費交付金・学生納付金収入への依存率を下げることである。

主な対処方針・今後の計画として、人件費縮減については、長期的な人事計画や学内定員削減計画の実行において、実質的削減方策を最終的に役員会で決定するという基本方針を策定し、今後、毎年度1%以上の削減を行い、適時適切に必要な見直しを行うことを決定した。経費節減については、共通講義棟の照明を、省電力タイプの物に交換して、電気料の節減を図った。また、事務効率化の観点から、他大学との「共同調達に関する協定」を締結し、平成20年度調達分から実施している。自己収入の増加については、役員会の下に「外部資金対策室」を設け、積極的な受け入れに取り組んだ。

「基本情報」

1. 目標

本学は、建学以来、福島という地域に根ざした研究と教育を進め、「人材育成大学」として教育者・地方公務員・ビジネスマンなどの専門的職業人を主として東日本各地に送り出してきた。

21世紀における「人材育成大学」の社会的使命は、広い教養と豊かな創造力を有し、地域活動や企業活動を中心に牽引していく専門的職業人を送り出すことである。こうした専門的職業人の育成を図るために、教育組織を学部学科課程制から学群学類制に転換し、文理・理文融合を推進する。

同時に、学系制を導入して研究組織を再編・整備し、自然と人間との共生のあり方を地域次元から探求していく個性あるプロジェクトを進める。

併せて、アジア・太平洋地域の学術交流協定校を機軸として、教育研究のグローバルな展開を図る。

2. 業務内容

福島大学は、戦前からの伝統を受け継ぎ、昭和24年に、学芸学部（後に教育学部）と経済学部の2学部構成の新制大学として発足した。しかし、福島市街地の二つのキャンパスに分散していたため、金谷川の地に統合移転して、業務を開始したのは昭和54年以降だが同時に人文系と理工系を含む総合大学化の計画実現に向けて邁進してきた。

昭和62年10月に行政社会学部を増設し、平成16年10月、国立大学法人化のなかで理工学群共生システム理工学類を創設して、新たな出発をしている。

旧3学部を継承した3学類を人文社会学群としてくくり、2学群4学類の教育組織を実現するとともに、全教員が参加する研究組織として12の学系を構築した。また、人文社会学群には、伝統ある社会人教育を継承して、夜間主コース（「現代教養コース」）を有している。

また、平成20年4月に大学院共生システム理工学研究科を創設し、4学類4研究科となり、充実した教育・研究を推進している。

さらに、学内附属組織として、附属図書館、附属4校園、及び4つの全学センターを有し、本学の教育、研究、社会貢献に努力している。

現在、福島大学は、今後10年間の大学運営方針をまとめた長期構想計画として、「教育の質の向上」「大学院の創設・充実」「特色ある研究の推進」「地域連携の強化」を重点目標とする「福島大学プラン2015」を策定し、教育環境の改善を積極的に進めている。

福島県及び東北・北関東を中心とし、地域に存在感があり、全国的にも注目される「教育重視の人材育成大学」として発展すべく、今後とも努力を重ねたい。

3. 沿革

昭和24年 5月	福島師範学校、福島青年師範学校、福島経済専門学校を包括して、学芸学部と経済学部からなる新制大学として設置。
昭和27年 4月	経済短期大学部を併設。
昭和41年 4月	学芸学部を教育学部に名称変更。
昭和55年 3月	経済短期大学部を廃止。
昭和56年 4月	分離していた2つのキャンパスを統合し、現在の金谷川キャンパスに移転。
昭和60年 4月	大学院教育学研究科修士課程を設置。
昭和61年 4月	大学院経済学研究科修士課程を設置。
昭和62年10月	行政社会学部を新設し、3学部構成となる。
平成 5年 4月	大学院地域政策科学研究科修士課程を設置。
平成16年10月	全学再編を行い、「3学部」制から「2学群（人文学群、理工学群）4学類（人間発達文化学類、行政政策学類、経済経営学類、共生システム理工学類）12学系」制へ移行。
平成20年 4月	大学院共生システム理工学研究科修士課程を設置。

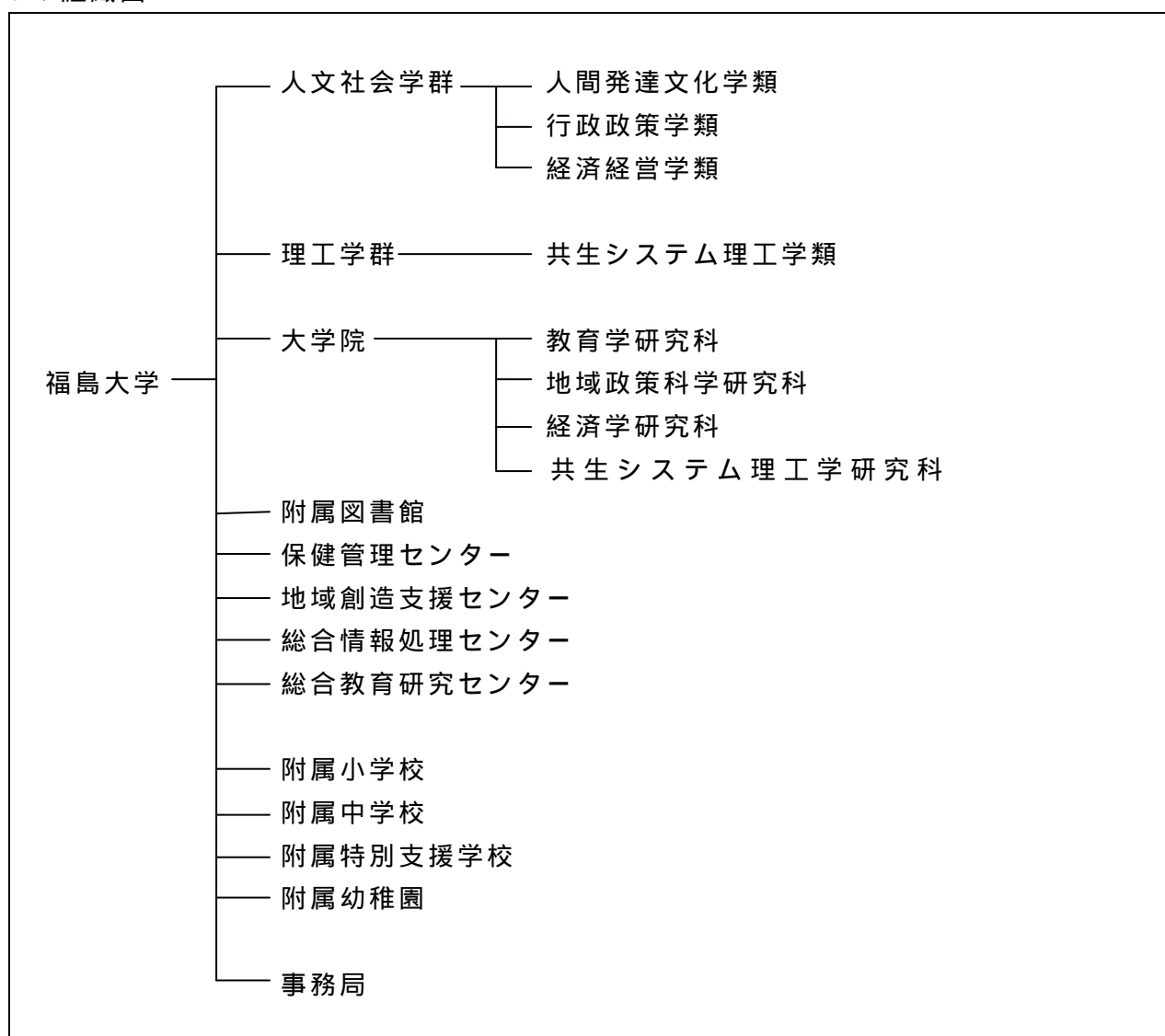
4 . 設立根拠法

国立大学法人法（平成15年法律第112号）

5 . 主務大臣（主務省所管局課）

文部科学大臣（文部科学省高等教育局国立大学法人支援課）

6 . 組織図



7. 所在地

福島県福島市

8. 資本金の状況

27,051,452,877円(全額 政府出資)

9. 学生の状況

総学生数 4,511人
 学士課程 4,318人
 修士課程 193人

10. 役員の状況

役職	氏名	任期	経歴
学長	今野 順夫	平成18年4月1日 ～平成22年3月31日	平成9年10月～平成11年9月 福島大学行政社会学部長 平成14年2月～平成16年3月 福島大学副学長(学務担当) 平成16年4月～平成18年3月 福島大学理事・副学長(総務担当)
理事・副学長 (総務担当)	中井 勝己	平成20年4月1日 ～平成22年3月31日	平成15年10月～平成17年3月 福島大学行政社会学部(行政政策学類)長 平成18年4月～平成20年3月 福島大学理事・副学長(学務担当)
理事・副学長 (学務・地域連携担当)	清水 修二	平成20年4月1日 ～平成22年3月31日	平成14年4月～平成16年3月 福島大学経済学部長
理事・副学長 (教育担当)	中村 泰久	平成20年4月1日 ～平成22年3月31日	平成17年4月～平成19年3月 福島大学人間発達文化学類長

役 職	氏 名	任 期	経 歴
理 事 (非常勤) 〔地域連携・経営分析担当〕	齊藤 光男	平成20年4月1日 ～平成22年3月31日	平成7年6月～平成10年6月 (株)東邦銀行取締役
監事(非常勤) (業務監査)	佐藤 博明	平成20年4月1日 ～平成22年3月31日	平成9年4月～平成15年3月 静岡大学学長 平成16年4月～平成18年3月 宇都宮大学監事 平成18年4月～平成20年3月 福島大学監事(非常勤)
監事(非常勤) (会計監査)	車田 正光	平成20年4月1日 ～平成22年3月31日	昭和57年8月～昭和58年12月 等松青木監査法人公認会計士 昭和59年1月～ 車田正光公認会計士事務所所長 平成18年4月～平成20年3月 福島大学監事(非常勤)

1 1 . 教職員の状況

<p>教員 414人(うち常勤340人、非常勤74人) 職員 195人(うち常勤137人、非常勤58人) (常勤教職員の状況)</p> <p>常勤教職員は前年度比で18人(3.6%)減少しており、平均年齢は44歳(前年度44歳)となっております。このうち、国からの出向者は0人、地方公共団体からの出向者0人、民間からの出向者は0人です。</p>
--

「 財務諸表の概要 」

(勘定科目の説明については、別紙「財務諸表の科目」を参照願います。)

(以下、単位未満切捨てにより作成しております。)

1 . 貸借対照表 (<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

(単位：百万円)

資産の部	金額	負債の部	金額
固定資産	30,181	固定負債	3,595
有形固定資産	30,073	資産見返負債	3,356
土地	18,270	センター債務負担金	-
減損損失累計額	28	長期借入金等	-
建物	10,013	引当金	3
減価償却累計額等	2,028	退職給付引当金	3
構築物	892	その他の引当金	-

資産の部	金額	負債の部	金額
減価償却累計額等	437	その他の固定負債	235
工具器具備品	1,267	流動負債	1,792
減価償却累計額等	708	運営費交付金債務	302
その他の有形固定資産	2,832	その他の流動負債	1,489
その他の固定資産	107	負債合計	5,388
		純資産の部	
流動資産	1,930	資本金	27,051
現金及び預金	1,867	政府出資金	27,051
その他の流動資産	63	資本剰余金	724
		利益剰余金（繰越欠損金）	396
		その他の純資産	-
		純資産合計	26,723
資産合計	32,112	負債純資産合計	32,112

2 . 損益計算書 (<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

(単位：百万円)

	金額
経常費用(A)	6,567
業務費	6,187
教育経費	976
研究経費	297
診療経費	-
教育研究支援経費	152
人件費	4,569
その他	191
一般管理費	364
財務費用	15
雑損	0
経常収益(B)	6,682
運営費交付金収益	3,496
学生納付金収益	2,584
附属病院収益	-
その他の収益	601
臨時損益(C)	0
目的積立金取崩額(D)	2
当期総利益（当期総損失）(B-A+C+D)	117

3. キャッシュ・フロー計算書

(<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

(単位：百万円)

	金額
業務活動によるキャッシュ・フロー(A)	195
原材料、商品又はサービス購入による支出	1,076
人件費支出	4,782
その他の業務支出	398
運営費交付金収入	3,474
学生納付金収入	2,558
附属病院収入	-
その他の業務収入	420
投資活動によるキャッシュ・フロー(B)	463
財務活動によるキャッシュ・フロー(C)	72
資金に係る換算差額(D)	-
資金増加額(又は減少額)(E=A+B+C+D)	340
資金期首残高(F)	2,148
資金期末残高(G=F+E)	1,807

4. 国立大学法人等業務実施コスト計算書

(<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

(単位：百万円)

	金額
業務費用	3,590
損益計算書上の費用	6,567
(控除)自己収入等	2,977
(その他の国立大学法人等業務実施コスト)	
損益外減価償却相当額	448
損益外減損損失相当額	31
引当外賞与増加見積額	35
引当外退職給付増加見積額	290
機会費用	355
(控除)国庫納付額	-
国立大学法人等業務実施コスト	4,681

5 . 財務情報

(1) 財務諸表の概況

主要な財務データの分析（内訳・増減理由）

ア．貸借対照表関係

（資産合計）

平成 20 年度末現在の資産合計は前年度比 859 百万円（2%）（以下、特に断らない限り前年度比・合計）減の 32,112 百万円となっている。

主な増加要因としては、図書が、購入により 42 百万円（1%）増の 2,797 百万円となったことが挙げられる。

また、主な減少要因としては、建物が減価償却等により 267 百万円（3%）減の 7,985 百万円となったこと、現金及び預金が、期末時点の未払金計上額の減により 440 百万円（19%）減の 1,867 百万円となったことが挙げられる。

（負債合計）

平成 20 年度末現在の負債合計は 493 百万円（8%）減の 5,388 百万円となっている。主な増加要因としては、固定資産の購入により資産見返負債が、91 百万円（2%）増の 3,356 百万円となったことなどが挙げられる。

また、主な減少要因としては、期末時点の未払金計上額が 410 百万円（32%）減の 852 百万円となったこと、運営費交付金債務の未使用額の減により 108 百万円（26%）減の 302 百万円が挙げられる。

（純資産合計）

平成 20 年度末現在の純資産合計は 365 百万円（1%）減の 26,723 百万円となっている。主な増加要因としては、利益剰余金が、68 百万円（20%）増の 396 百万円となったことが挙げられる。

また、主な減少要因としては、資本剰余金が、433 百万円（149%）減の 724 百万円となったことが挙げられる。

イ．損益計算書関係

（経常費用）

平成 20 年度の経常費用は 27 百万円（0%）減の 6,567 百万円となっている。主な増加要因としては、教育経費が、教育施設の改修等に伴い 230 百万円（30%）増の 976 百万円となったことが挙げられる。

また、主な減少要因としては、退職者の不補充等により人件費が前年度比 357 百万円減（7%）減の 4,569 百万円となったことが挙げられる。

（経常収益）

平成 20 年度の経常収益は 101 百万円（1%）減の 6,682 百万円となっている。主な増加要因としては、受託研究等収益が、受託研究等の増加に伴い 52 百万

円（35%）増の198百万円となったこと、補助金等収益が、29百万円（3,596%）増の30百万円となったことが挙げられる。

また、主な減少要因としては、運営費交付金収益が、退職手当支給額の減により、110百万円（3%）減の3,496百万円となったことが挙げられる。

（当期総損益）

上記経常損益の状況、目的積立金を使用したことによる目的積立金取崩額2百万円を計上した結果、平成20年度の当期総利益は74百万円（38%）減の117百万円となっている。

ウ．キャッシュ・フロー計算書関係

（業務活動によるキャッシュ・フロー）

平成20年度の業務活動によるキャッシュ・フローは539百万円（73%）減の195百万円となっている。

主な増加要因としては、受託研究等収入が26百万円（19%）増の162百万円となったことが挙げられる。

主な減少要因としては、運営費交付金収入が304百万円（8%）減の3,474百万円となったことが挙げられる。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

平成20年度の投資活動によるキャッシュ・フローは746百万円（263%）減の463百万円となっている。

主な増加要因としては、定期預金の払戻しによる収入が922百万円（84%）増の2,015百万円となったことが挙げられる。

主な減少要因としては、定期預金の預入れによる支出が735百万円（62%）増の1,916百万円となったことが挙げられる。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

平成20年度の財務活動によるキャッシュ・フローは6百万円（10%）減の72百万円となっている。

主な減少要因としては、リース債務の返済による支出が7百万円（14%）減の56百万円となったことが挙げられる。

エ．国立大学法人等業務実施コスト計算書関係

（国立大学法人等業務実施コスト）

平成20年度の国立大学法人等業務実施コストは55百万円（1%）減の4,681百万円となっている。

主な増加要因としては、固定資産の減損により、損益外減損損失相当額が31百万円（65,841%）増の31百万円となったことが挙げられる。

また、主な減少要因としては、一般管理費の修繕が少なくなったことに伴い一般管理費が62百万円（14%）減の364百万円となったことが挙げられる。

（表） 主要財務データの経年表

（単位：百万円）

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
資産合計	30,481	31,513	31,655	32,971	32,112
負債合計	3,871	5,567	5,056	5,882	5,388
純資産合計	26,610	25,945	26,599	27,089	26,723
経常費用	5,966	6,335	6,381	6,595	6,567
経常収益	6,090	6,307	6,468	6,784	6,682
当期総損益	124	96	91	191	117
業務活動によるキャッシュ・フロー	892	818	230	735	195
投資活動によるキャッシュ・フロー	64	254	425	282	463
財務活動によるキャッシュ・フロー	-	-	0	65	72
資金期末残高	827	1,391	1,195	2,148	1,807
国立大学法人等業務実施コスト	5,060	4,787	4,724	4,736	4,681
（内訳）					
業務費用	3,736	3,576	3,505	3,657	3,590
うち損益計算書上の費用	6,350	6,335	6,381	6,595	6,567
うち自己収入	2,614	2,759	2,875	2,937	2,977
損益外減価償却相当額	633	642	537	459	448
損益外減損損失相当額	-	-	0	0	31
引当外賞与増加見積額	-	-	-	9	35
引当外退職給付増加見積額	337	100	244	288	290
機会費用	353	467	435	339	355
（控除）国庫納付額	-	-	-	-	-

セグメントの経年比較・分析（内容・増減理由）

前年度までは、セグメントは単一であるとして情報の記載を省略しておりましたが、本年度より本学の業務に応じて、大学と附属学校園の2つに区分し、各セグメントへ配賦しない業務損益及び帰属資産は法人共通へ計上しております。

ア．業務損益

（表）業務損益の経年表

（単位：百万円）

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
大学					1,483
附属学校園					809
法人共通					2,407
合計	123	27	86	188	114

イ．帰属資産

(表) 帰属資産の経年表

(単位：百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
大学					21,529
附属学校園					7,523
法人共通					3,058
合計	30,481	31,513	31,655	32,971	32,112

目的積立金の申請状況及び使用内訳等

当期総利益 120 百万円のうち、中期計画の剰余金の使途において定めた教育研究の質の向上に充てるため、120 百万円を目的積立金として申請している。

平成 20 年度においては、教育研究環境整備・組織運営改善積立金の目的に充てるため、49 百万円を使用した。

(2) 施設等に係る投資等の状況（重要なもの）

当事業年度中に完成した主要施設等

M 講義棟空調設備工事（取得原価 46 百万円）

体育系サークル棟改修工事（取得原価 36 百万円）

共通講義棟 M・L 講義棟照明器具取替工事（取得原価 11 百万円）

当事業年度において継続中の主要施設等の新設・拡充

該当なし。

当事業年度中に処分した主要施設等

該当なし

当事業年度において担保に供した施設等

該当なし。

(3) 予算・決算の概況

以下の予算・決算は、国立大学法人等の運営状況について、国のベースにて表示しているものである。

(単位：百万円)

区分	16年度		17年度		18年度		19年度		20年度		
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	差額理由
収入	6,159	6,539	7,318	7,528	6,818	7,102	7,407	7,599	6,356	6,500	
運営費交付金収入	3,580	3,580	4,156	4,156	3,485	3,485	3,779	3,778	3,516	3,474	
補助金等収入	27	27	465	483	657	766	859	859	28	58	
学生納付金収入	2,419	2,492	2,548	2,478	2,516	2,554	2,541	2,544	2,585	2,561	
附属病院収入											
その他収入	133	440	149	411	160	297	228	418	227	407	

区分	16年度		17年度		18年度		19年度		20年度		
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	差額理由
支出	6,159	5,999	7,318	7,280	6,818	6,887	7,407	7,203	6,356	6,517	
教育研究経費	5,333	5,332	6,211	6,176	5,635	5,466	5,874	5,656	5,738	5,692	
診療経費											
一般管理費	731	571	561	475	444	486	543	480	431	476	
その他支出	95	96	546	629	739	935	990	1,067	187	351	
収入 - 支出	0	540	0	248	0	215	0	396	0	19	

「 事業の実施状況 」

(1) 財源構造の概略等

当法人の経常収益は6,682百万円で、その内訳は、運営費交付金収益3,496百万円（52%（対経常収益比、以下同じ。））、授業料収益2,167百万円（32%）、その他1,018百万円（16%）となっている。

(2) 財務データ等と関連付けた事業説明

ア 大学セグメント

大学セグメントは、人文社会学群、理工学群、大学院、附属図書館、保健管理センター、地域創造支援センター、総合情報処理センター、総合教育研究センターにより構成されている。

「教育重視の人材育成大学」を基本的な目標としており、平成20年度においては、年度計画において定めた教育研究等の質の向上を実現するため、特別教育研究経費の教育改革事業として、「大学と地域とが一体で行うキャリア教育の推進」、連携融合事業として、「阿武隈川流域水循環健全化に関する研究」、研究推進事業として「大都市圏廃棄物の持続循環型産業システム体系の構築」、及び政策課題として「福大スタンダード」を行った。また、「社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム」の採択を受け、地域貢献事業として、「高齢社会における弱者の権利と生活を護る担い手育成プログラム」の事業を行った。

今年度から実施している大都市圏廃棄物の持続循環型産業システム体系の構築については、福島地域での喫緊な課題である廃棄物処理問題を取り上げ、技術的および学問的側面から、様々な形で地域の産業界・企業と共同研究を実施し、地域との連携を強めるとともに、地域の課題を大学の研究課題として取り上げ、人材育成に結び付ける教育参画体制を設立し産業界との共同研究を通じて地域貢献できる教育制度の実現を図ること目的としている。今年度は、戦略研究会を結成し、大学内に事務局を置き連携共同体制を推進した。また、汚染土壌の改質、汚泥減溶化、廃プラスチック表面改質化、糞尿等廃棄物堆肥化、エコ製品創製、効率的収集化、物流機構改善、エコ啓発教育を機関研究として位置づけて、対応戦略の方針を設定した。さらに

、購入分析機器で廃棄物の後処理および有害ガス、有害物質の含有量の実態調査をし、廃棄物の共通属性とその特徴を解析し、戦略的研究方針を設定することをを行った。

特別教育研究経費事業の実施財源は、運営費交付金収益94百万円（100%）となっている。また、事業に要した経費は、教育経費45百万円、研究経費17百万円、人件費31百万円となっている。また、地域貢献事業の実施財源は受託事業収益13百万円であり、事業費も13百万円となっている。

イ 附属学校園セグメント

附属学校園セグメントは、附属小学校、附属中学校、附属幼稚園、附属特別支援学校により構成されている。

平成20年度においては、年度計画に定めた安全管理に関する目標を達成するため、附属幼稚園の窓ガラスに、飛散防止ガラスフィルムを張り、さらに監視カメラの増設を実施した。

特別教育経費の教育改革事業として、「発達支援相談室の活動を中核とした特別支援教育の実践的研究」の事業を行った。附属特別支援学校に設置した発達支援相談室「けやき」を中核として、特別支援教育の実践的研究を推進するとともに、県・市教育委員会等と連携して、専門的力量をもった現職教員の研修の場等を提供する。今年度も前年度に引き続き、特別支援教育コーディネーター養成プログラムのシステム作りに着手し、教員対象の研修システムになるよう研究を進めるとともに、WEBサイトでの課題指導教材や特別支援教育コーディネーター養成資料の公開を検討した。

さらに、今年度は大学と附属学校園が連携し、軽度発達障害児とその保護者、担任及び在籍校への支援体制を確立した。

特別教育研究経費事業の実施財源は、運営費交付金収益15百万円（100%）となっている。また、事業に要した経費は、教育経費6百万円、人件費9百万円となっている。

(3) 課題と対処方針等

当法人では、運営費交付金の縮減に対応するため、経費の節減に努めるとともに、寄附金などの外部資金の獲得に努めた。経費の節減については、共通講義等照明の省電力タイプへの交換による電気料の節減を図った。また、事務効率化の観点から、本学、東北大学、宮城教育大学、山形大学の4大学による「共同調達に関する協定」を締結し、平成20年度調達分から実施している。外部資金の獲得については、役員会の下に「外部資金対策室」を設け、積極的な受け入れに取り組み、外部資金獲得の増を実現した。また、自己収入の増加を図るため、卒業生に係る証明書発行手数料の徴収を実施し、さらに学生証再発行手数料の徴収を策定した。

また、施設・設備の整備については、共通講義棟（M講義棟）へ冷房設備を設置しさらに、体育系サークル棟及び老朽施設・設備の改修工事を実施した。

「 その他事業に関する事項 」

1. 予算、収支計画及び資金計画

(1) . 予算

決算報告書参照 (<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

(2) . 収支計画

年度計画及び財務諸表 (損益計算書) 参照

(<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

(3) . 資金計画

年度計画及び財務諸表 (キャッシュ・フロー計算書) 参照

(<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/nationaluniv/index.html>)

2. 短期借入れの概要

該当なし。

3. 運営費交付金債務及び当期振替額の明細

(1) 運営費交付金債務の増減額の明細

(単位 : 百万円)

交付年度	期首残高	交付金当期交付金	当期振替額				期末残高
			運営費交付金収益	資産見返運営費交付金	資本剰余金	小計	
16年度	0	-	-	-	-	-	0
17年度	0	-	-	-	-	-	0
18年度	-	-	-	-	-	-	-
19年度	410	-	366	-	-	366	43
20年度	-	3,474	3,129	86	-	3,215	258

(2) 運営費交付金債務の当期振替額の明細

平成19年度交付分

(単位 : 百万円)

区分	金額	内 訳
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	11
	資産見返運営費交付金	-
	資本剰余金	-
		業務達成基準を採用した事業等 : 特別支援事業 (再チャレンジ支援経費) 当該業務に関する損益等 ア) 損益計算書に計上した費用の額 : 11 (教育経費 : 11)

区 分		金 額	内 訳
	計	11	イ)自己収入に係る収益計上額： - ウ)固定資産の取得額： - 運営費交付金収益化額の積算根拠 事業等の成果の達成度合い等を勘案し、11百万円を収益化 。
費用進行基準による振替額	運営費交付金収益	355	費用進行基準を採用した事業等：退職手当 当該業務に係る損益等
	資産見返運営費交付金	-	ア)損益計算書に計上した費用の額：355 (教員人件費：256、職員人件費：98)
	資本剰余金	-	イ)自己収入に係る収益計上額： - ウ)固定資産の取得額： - 運営費交付金の振替額の積算根拠
	計	355	業務進行に伴い支出した運営費交付金債務355百万円を収益化。
国立大学法人会計基準第77第3項による振替額		-	該当なし
合計		366	

平成20年度交付分

(単位：百万円)

区 分		金 額	内 訳
業務達成基準による振替額	運営費交付金収益	137	業務達成基準を採用した事業等：教育改革(大学と地域とが一体で行うキャリア教育の推進)、政策課題対応経費(福大スタンダード)、研究推進(大都市圏廃棄物の持続循環型産業システム体系の構築)、政策課題対応経費(FD研修)
	資産見返運営費交付金	16	、教育改革(発達支援相談室の活動を中核とした特別支援教育の実践的研究)、連携融合事業(阿武隈川流域水循環健全化に関する研究、その他
	資本剰余金	-	当該業務に関する損益等
	計	154	ア)損益計算書に計上した費用の額：137 (教育経費110、研究経費25) イ)自己収入に係る収益計上額： - ウ)固定資産の取得額：16 (教育機器6、研究機器9) 運営費交付金収益化額の積算根拠

区 分		金 額	内 訳
			<p>国費留学生支援事業については、予定した在籍者数に満たなかったため、当該未達分を除いた額0百万円を収益化。</p> <p>その他の業務達成基準を採用している事業等については、それぞれの事業等の成果の達成度合い等を勘案し、137百万円を収益化。</p>
期間進行基準による振替額	運営費交付金収益	2,865	<p>期間進行基準を採用した事業等：業務達成基準及び費用進行基準を採用した業務以外の全ての業務</p> <p>当該業務に関する損益等</p> <p>ア)損益計算書に計上した費用の額：2,865 (役員人件費：42、教員人件費：2,213、職員人件費：609)</p> <p>イ)自己収入に係る収益計上額：-</p> <p>ウ)固定資産の取得額：-</p> <p>運営費交付金の振替額の積算根拠</p> <p>大学院学生収容定員が一定数(90%)を満たさなかったため、国庫返納額を除いた額を、期間進行業務に係る運営費交付金債務を収益化。</p>
	資産見返運営費交付金	-	
	資本剰余金	-	
	計	2,865	
費用進行基準による振替額	運営費交付金収益	126	<p>費用進行基準を採用した事業等：退職手当、移転費、その他</p> <p>当該業務に係る損益等</p> <p>ア)損益計算書に計上した費用の額：126 (教育経費：53、研究経費：28、教育研究支援経費：7、一般管理費：36)</p> <p>イ)自己収入に係る収益計上額：-</p> <p>ウ)固定資産の取得額：研究機器69</p> <p>運営費交付金の振替額の積算根拠</p> <p>業務進行に伴い支出した運営費交付金債務126百万円を収益化。</p>
	資産見返運営費交付金	69	
	資本剰余金	-	
	計	195	
国立大学法人会計基準第77第3項による振替額		-	該当なし
合計		3,215	

(3) 運営費交付金債務残高の明細

(単位 : 百万円)

交付年度	運営費交付金債務残高	残高の発生理由及び収益化等の計画
16年度	業務達成基準 を採用した業 務に係る分	- 該当なし
	期間進行基準 を採用した業 務に係る分	- 該当なし
	費用進行基準 を採用した業 務に係る分	0 一般施設借料(土地建物借料)、学校災害共済掛金、下水道 受益者負担金、在外研究員等旅費 ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、 中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	計	0
17年度	業務達成基準 を採用した業 務に係る分	0 国費留学生経費 ・国費留学生経費について、研究留学生・学部留学生区分に おける在籍者が予定数に達しなかったため、その未達分を債 務として繰越したものの。 ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、 中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	期間進行基準 を採用した業 務に係る分	- 該当なし
	費用進行基準 を採用した業 務に係る分	0 一般施設借料(土地建物借料) ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、 中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	計	0
18年度	業務達成基準 を採用した業 務に係る分	- 該当なし
	期間進行基準 を採用した業 務に係る分	- 該当なし
	費用進行基準 を採用した業 務に係る分	- 該当なし
	計	-

交付年度	運営費交付金債務残高	残高の発生理由及び収益化等の計画
19年度	業務達成基準を採用した業務に係る分	0 国費留学生経費 ・国費留学生経費について、研究留学生区分における在籍者が予定数に達しなかったため、その未達分を債務として繰越したものの。 ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	期間進行基準を採用した業務に係る分	- 該当なし
	費用進行基準を採用した業務に係る分	43 退職手当 ・退職手当の執行残であり、翌事業年度以降に使用する予定。 一般施設借料（土地建物借料） ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	計	43
20年度	業務達成基準を採用した業務に係る分	11 特別支援事業（再チャレンジ支援） ・就学機会確保のための経費の執行残であり、翌事業年度以降に使用する予定。 国費留学生経費 ・国費留学生経費について、研究留学生区分における在籍者が予定数に達しなかったため、その未達分を債務として繰越したものの。 ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	期間進行基準を採用した業務に係る分	2 基礎的な運営費交付金 ・大学院学生収容定員が一定数（90%）を満たさなかったため、国庫返納額として繰越したものの。 ・当該債務は、翌事業年度において使用の方途がないため、中期目標期間終了時に国庫返納する予定である。
	費用進行基準を採用した業務に係る分	244 退職手当 ・退職手当の執行残であり、翌事業年度以降に使用する予定。
	計	258

財務諸表の科目

1. 貸借対照表

有形固定資産：土地、建物、構築物等、国立大学法人等が長期にわたって使用する有形の固定資産。

減損損失累計額：減損処理（固定資産の使用実績が、取得時に想定した使用計画に比して著しく低下し、回復の見込みがないと認められる場合等に、当該固定資産の価額を回収可能サービス価額まで減少させる会計処理）により資産の価額を減少させた累計額。

減価償却累計額等：減価償却累計額及び減損損失累計額。

その他の有形固定資産：図書、工具器具備品、車両運搬具等が該当。

その他の固定資産：無形固定資産（特許権等）、投資その他の資産（投資有価証券等）が該当。

現金及び預金：現金（通貨及び小切手等の通貨代用証券）と預金（普通預金、当座預金及び一年以内に満期又は償還日が訪れる定期預金等）の合計額。

その他の流動資産：未収附属病院収入、未収学生納付金収入、医薬品及び診療材料、たな卸資産等が該当。

資産見返負債：運営費交付金等により償却資産を取得した場合、当該償却資産の貸借対照表計上額と同額を運営費交付金債務等から資産見返負債に振り替える。計上された資産見返負債については、当該償却資産の減価償却を行う都度、それと同額を資産見返負債から資産見返戻入（収益科目）に振り替える。

センター債務負担金：旧国立学校特別会計から独立行政法人国立大学財務・経営センターが承継した財政融資資金借入金で、国立大学法人等が債務を負担することとされた相当額。

長期借入金等：事業資金の調達のため国立大学法人等が借り入れた長期借入金、PFI債務、長期リース債務等が該当。

引当金：将来の特定の費用又は損失を当期の費用又は損失として見越し計上するもの。退職給付引当金等が該当。

運営費交付金債務：国から交付された運営費交付金の未使用相当額。

政府出資金：国からの出資相当額。

資本剰余金：国から交付された施設費等により取得した資産（建物等）等の相当額。

利益剰余金：国立大学法人等の業務に関連して発生した剰余金の累計額。

繰越欠損金：国立大学法人等の業務に関連して発生した欠損金の累計額。

2. 損益計算書

業務費：国立大学法人等の業務に要した経費。

教育経費：国立大学法人等の業務として学生等に対し行われる教育に要した経費。

研究経費：国立大学法人等の業務として行われる研究に要した経費。

診療経費：国立大学附属病院における診療報酬の獲得が予定される行為に要した

経費。

教育研究支援経費：附属図書館、大型計算機センター等の特定の学部等に所属せず、法人全体の教育及び研究の双方を支援するために設置されている施設又は組織であって学生及び教員の双方が利用するものの運営に要する経費

人件費：国立大学法人等の役員及び教職員の給与、賞与、法定福利費等の経費。

一般管理費：国立大学法人等の管理その他の業務を行うために要した経費。

財務費用：支払利息等。

運営費交付金収益：運営費交付金のうち、当期の収益として認識した相当額。

学生納付金収益：授業料収益、入学料収益、入学検定料収益の合計額。

その他の収益：受託研究等収益、寄附金等収益、補助金等収益等。

臨時損益：固定資産の売却（除却）損益、災害損失等。

目的積立金取崩額：目的積立金とは、前事業年度以前における剰余金（当期総利益）のうち、特に教育研究の質の向上に充てることを承認された額のことであるが、それから取り崩しを行った額。

3．キャッシュ・フロー計算書

業務活動によるキャッシュ・フロー：原材料、商品又はサービスの購入による支出、人件費支出及び運営費交付金収入等の、国立大学法人等の通常の業務の実施に係る資金の収支状況を表す。

投資活動によるキャッシュ・フロー：固定資産や有価証券の取得・売却等による収入・支出等の将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の収支状況を表す。

財務活動によるキャッシュ・フロー：増減資による資金の収入・支出、債券の発行・償還及び借入れ・返済による収入・支出等、資金の調達及び返済等に係る資金の収支状況を表す。

資金に係る換算差額：外貨建て取引を円換算した場合の差額相当額。

4．国立大学法人等業務実施コスト計算書

国立大学法人等業務実施コスト：国立大学法人等の業務運営に関し、現在又は将来の税財源により負担すべきコスト。

損益計算書上の費用：国立大学法人等の業務実施コストのうち、損益計算書上の費用から学生納付金等の自己収入を控除した相当額。

損益外減価償却相当額：講堂や実験棟等、当該施設の使用により一般に収益の獲得が予定されない資産の減価償却費相当額。

損益外減損損失相当額：国立大学法人等が中期計画等で想定した業務を行ったにもかかわらず生じた減損損失相当額。

引当外賞与増加見積額：支払財源が運営費交付金であることが明らかと認められる場合の賞与引当金相当額の増加見積相当額。前事業年度との差額として計上（当事業年度における引当外賞与引当金見積額の総額は、貸借対照表に注記）。

引当外退職給付増加見積額：財源措置が運営費交付金により行われることが明らかと認められる場合の退職給付引当金増加見積額。前事業年度との差額として計上（当事業年度における引当外退職給付引当金見積額の総額は貸借対照表に注記）。

機会費用：国又は地方公共団体の財産を無償又は減額された使用料により賃貸した場合の本来負担すべき金額等。